

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 6日現在

機関番号：16201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820034

研究課題名（和文）所有とジェンダー：フォークナーとハーストンの小説の比較研究

研究課題名（英文）Gender and Ownership of Property: an Intertextual Study of Fiction of Faulkner and Hurston

研究代表者

山内 玲 (YAMAUCHI RYO)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：60609874

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、William Faulkner と Zora Neale Hurston の小説を、ジェンダーと所有という視点から考察・比較することにより、同時代を生きた二人の作家の接点と相違点を探ることにある。この白人男性作家と黒人女性作家の比較研究は、近年多文化主義的な視点から進行している 20 世紀初頭のアメリカ文学における白人作家と黒人作家の比較研究に対し、あまり比較されることのない二人の同時代作家の作品の関係を新たに見出す意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This study aims at comparing the novels of William Faulkner and Zora Neale Hurston in term of gender and ideas about ownership of property, thus clarifying the similarities and differences between these two contemporaries who lived and wrote fiction in the early 20th century. The examination of fiction of the white male writer and the black female writer sheds light on the significance of the intertextual relationship between their works which has been unmarked in the recent studies of the multicultural aspects of the black-white relationship in the early 20th century American literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：アメリカ文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：Hurston, Faulkner, Race, Gender, Racial Consciousness

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の構想は、これまで研究代表者の行なってきた William Faulkner の作品における William Faulkner の作品における白人性をジェンダー・セクシュアリティの問題を視

野に入れつつ研究するという、これまでの研究テーマの延長上に着想を得たものである。より正確に言えば、Faulkner の作品研究の継続と、Faulkner の同時代の黒人作家とその歴史的文脈に関心が広がっていったのと二つ

の方向性から、着想を得た。

他方、物理的な環境の面からの変化も本研究に影響を及ぼしている。勤務校が変わったことにより、これまでは近隣の大学図書館で閲覧・貸借することのできた文献や大型のリファレンス・ブックなどに容易にアクセスすることができなくなったため、新たな研究に向けて必要となる資料・文献を集めるとともに、基礎的な研究環境を整える必要があった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、白人男性作家 William Faulkner (1897-1962) と黒人女性作家 Zora Neale Hurston (1903-1960) の小説を、ジェンダーと所有という視点から考察・比較することにより、同時代を生きた二人の作家の接点と相違点を探ることにある。

本研究の意義を説明するにあたり、まずは先行研究に対する位置づけを確認しておきたい。20世紀初頭から前半期の作家を対象とする文学研究は、当時の人種隔離政策を反映させたが如く、白人作家(モダニズム)と黒人作家(ハーレム・ルネッサンス)の研究はそれぞれ棲み分けがなされており、その同時代性にもかかわらず、比較考察の対象とされることはおろか並列して論じられることが永らく皆無に等しかった。この人種の垣根を越える研究が台頭し始めたのは、Michael North の *The Dialect of Modernism* (1994) に代表される 1990 年代のことであり、現在では Werner Sollors の *Ethnic Modernism* (2008)、国内ならば舌津智之の『叙情するアメリカモダニズム文学の明滅』(2009)などに見られるように、白人作家と黒人作家をその同時代性という地平において考察する研究が現われている。それにもかかわらず、同じ時代の白人モダニスト作家の代表格と呼びうる Faulkner に関しては、同時代の黒人作家ではなく、世代的には後続に当たる黒人女性作家 Toni Morrison (1931-) との比較研究が圧倒的に多く、Philip M. Weinstein *What Else But Love?: the Ordeal of Race in Faulkner and Morrison* (1996) を嚆矢として、その後も比較考察を行なった研究書が陸続と出版されている。同時代性という点から見れば、Ernest Hemingway (1899- 1961) などの白人男性作家と比較されることは多いが、黒人作家との比較となると Richard Wright (1908-1960) のような男性作家との比較研究が確認されるばかりである。本研究開始当時 Faulkner と Hurston を併置して論じている研究書は Timothy P. Caron の *Struggles over the Word: Race and Religion in O'Connor, Faulkner, Hurston, and Wright*. (2000) と Barbara Ladd の *Resisting History: Gender, Modernity, and Authorship in William Faulkner, Zora Neale Hurston, and Eudora*

Welty (2007) の二冊のみであり、これらの研究書にしても Hurston と Faulkner の作品研究を同じ本の中に並列している以上のものではない。したがって、本研究は、第一にあまり多く比較されることのない Faulkner と Hurston という二人の作家の研究を通じて、その同時代性にとどまらない類似点を所有とジェンダーという研究テーマにおいて見出す意義を持つと言える。

## 3. 研究の方法

Faulkner と Hurston の一次文献と関連する二次文献の文献調査を行ない、それに基づき個々の作品分析と比較考察を行なう。

## 4. 研究成果

本研究の成果に関しては、平成 25 年 6 月 6 日現在、学会発表・研究論文などによる成果は、研究の目的に即したものはまだ示されていない。平成 24 年 1 月に突発性難聴を患い、当初予定されていた計画の変更を余儀なくされたからである。当初予定していた Faulkner と Hurston の小説の比較研究といい本研究の目的を達成するには、所定の 2 年間は無理だと判断し、下記に述べるように、まずは Hurston の代表作である *Their Eyes Were Watching God* の考察に焦点を絞り、今後の研究につながる形で計画を修正した次第である。

しかしながら、発症前に研究発表の準備を進め、本研究から派生的に生じた論文は成果報告として挙げておくことができるだろう。Faulkner の小説をアメリカン・ゴシック批評における 1990 年代の新歴史主義批評の流れに位置づけ、人種問題の観点、とりわけ黒人の表象という観点から Faulkner の代表的短編“A Rose for Emily”「エミリーに薔薇を」を Edgar Allan Poe の短編“The Black Cat”（「黒猫」）と Joyce Carol Oates の短篇“The Temple”「聖堂」との間テクスト的な読解により論じた論考「Poe を読む Faulkner を読む／読まない Oates アメリカン・ゴシック小説を巡る一考察」は、ゴシック小説というジャンルで展開される白人作家による黒人表象の不可視性という問題を論じている。Oates はアメリカン・ゴシックの短篇小説のアンソロジーを編むにあたり、Poe の「黒猫」と Faulkner の「エミリーに薔薇を」に対するオマージュ的な性格を持つ自作「聖堂」をアンソロジーに加えることにより、フェミニズム的な視点からの古典の読み直しという戦略を取りながら、これら二編の連続性を示した。しかしながら、白人女性作家による先行作品の批判的読み直しは、同時代の新歴史主義的批評が明らかにした「黒猫」に潜在する人種問題や、南部社会という黒人の問題を抜きにして語ることのできな

い「エミリーに薔薇を」の黒人の存在を捨象することにより、白人作家による黒人の存在の不可視化という性格を露呈することとなったのである。こうした Oates の短篇の性格や 1990 年代のアメリカン・ゴシック批評における黒人の表象への関心は、黒人女性作家である Hurston との比較にも寄与することになるだろう。

また当初研究期間中に予定されていた Hurston の *Their Eyes Were Watching God* に関する研究については、2013 年 6 月 8 日に日本アメリカ文学会中・四国大会(於松山大学)で、2013 年 10 月 12 日に日本アメリカ文学会全国大会(於明治学院大学)で、「*Their Eyes Were Watching God* の男性性表象に見る Zora Neale Hurston の人種意識」という題目で発表を行なう予定であり、その発表を下に研究論文を発表する予定である。概要は以下のとおりである。

Zora Neale Hurston は、1970 年代後半以降、黒人女性文学の伝統という系譜において再評価を受け、キャンソンの再検討を経たアメリカ文学史に確固たる地位を得た作家であり、同時に 1937 年に出版され、彼女の代表作となった *Their Eyes Were Watching God* は Janie Crawford の黒人女性の自己と声の獲得の物語として受け入れられるに至った。この動向に応じて強調されなくなったのが、再評価以前に見られた「悲劇の混血女性」という読みを成立させる要素、すなわち白人の祖先の存在をうかがわせる主人公の容姿に示されうような、混血性の問題である。この混血性に関して、近年の Hurston 研究では雑種性 (hybridity) の問題として再検討する批評が現れている。Hurston の白人パトロンとの関係や人類学者 Franz Boaz に師事を受けたことによる影響を指摘する形で、混血性を黒人女性作家における白人性の問題として抉り出すのである。こうした批評の動向を踏まえて *Their Eyes Were Watching God* を読むと、黒人女性の物語として解釈される過程で十分に掬い取られてこなかった作中の白人性の問題は確かにある。しかしながら、黒人作家の白人性という雑種性を強調するあまり看過してしまうのは、そうした雑種性を拒み、いわば純粋な黒人性の希求というテーマの作品を作り出す Hurston の人種意識なのである。

以上の想定に基づき、本発表は、同時代の黒人男性を巡る言説を参照しつつ、作品のプロットを通じて像を結ぶ作者の人種意識を男性性の表象という見地から考察する。まず確認すべきは、三人の夫たちとの関係を通じて展開する女性主人公の物語において、破局の要因となる出来事が示されるにあたり、これらの黒人男性たちが何らかの形で白人の価値観を具現する存在として描かれること

である。例えば、良好な関係を築いていた三番目の夫 Tea Cake との物語において、二人の関係の終焉につながる狂犬病にかかったのは、迫りくる台風を前にした彼の判断が白人の価値観に依拠した結果であった。

Janie の人生という舞台から退場していく黒人が白人の価値観を具現する物語に作者の人種意識を見出した上で注目したいのは、従来の研究ではその意義を看過されてきた黒人男性で、Janie の第四の夫候補でもありえた Mrs. Turner の弟である。この黒人男性は、Janie の白い肌への憧れと周囲への黒人への侮蔑を示す姉の口を通じて、Booker T. Washington の白人に対する阿りを罵倒する黒人民族主義的な性格を示す。こうした態度が W. E. B. Du Bois の *The Soul of Black Folk* における Washington 批判を想起させるのを念頭に置いた上でプロットという見地から検討したいのは、彼女の弟が作中に目立たぬ形で配置されているにもかかわらず、Janie と Tea Cake の関係に深い影を落としている点である。この名も与えられない黒人男性は、Tea Cake に嫉妬の念をもたらし、悪名高い暴力を Janie に行使する原因となり、二人の関係を悪化させる重要な役割を果たしていると言える。本発表では、こうした作品の細部に暗示される黒人男性の性質を分析し、純粋な黒人性を求める Hurston の人種意識が孕む複雑さを検討する。

以上が本発表の概略であるが、先行研究に対する意義としては次のとおりである。これまでの批評に置いては、黒人文化の追求者か白人文化への追従者かどちらかという二項対立的な論点において論じられるきらいがあったのに対し、本研究はこうした批評上の対立が生じる理由を同時代の黒人中産階級の男性性のあり方の変容に見出すという、歴史主義的なアプローチをとり、所有とジェンダーという本研究のテーマにつながる、黒人作家の階級意識の問題に光を当てることである。

同時にこの研究は、同時期に Faulkner が発表した長編小説 *Hamlet* (1940) や *Go Down Moses* における所有のテーマの議論に新たな視点をもたらす比較の参照点になることが期待される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 山内玲「Poe を読む Faulkner を読む／読まない Oates アメリカン・ゴシック小説を巡る一考察」『香川大学教育学部研究報告』第 I 部第 138 号 2012 年 9 月 pp. 119-29.

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① 山内玲「ポーを読むフォークナーを読む  
オーツ *American Gothic Tales* の編纂と  
アメリカン・ゴシック批評の地勢図」日  
本学術振興会科学研究費助成 基盤研究  
B『亡霊たちの近代——アイルランド小  
説通史』（代表 吉川信（群馬大学））主催  
研究会 2012 年 1 月 28 日 於香川大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山内 玲 (YAMAUCHI Ryo)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：60609874